

SSKP

はれのちくもり

第116号

ピアス通信別冊第37号

『はれのちくもり 別冊ピアス通信』では、就労移行事業所・自立訓練事業所ピアスのトレーニングやイベントを中心に「働く」ことに関する情報を発信していきます。

❀ 出版記念インタビュー ❀

『精神障害のある人の就労定着支援～当事者の希望から生まれた技法～』が5/28に発売されました。本を読んだメンバーから「30年間続けてこれた秘訣ってなんだろう」「『棕櫚亭』という名前の由来をもっと聞きたい」「今の精神科病院について、どう考えているのか」続々と疑問が飛び交います。そこで、今回はピアスの生みの親である天野聖子さんにインタビューを行いました。またとない「棕櫚亭」誕生秘話をさぐります。

Q.1 第2部の序文に「根性だけで30年は続かない」とあります。途中で諦めることなく、今日のピアスまで進めた原動力は何でしょうか。

A.まず、私自身が生活者だったこと。当時はシングルマザーで、小さい子どもを食べさせないといけないから「途中で諦める」という考えがそもそもなかったの。給料のもらえる仕事を一からやるよりは経験のあるケースワーカーをやってきたほうがいいのではないかと。利用者や職員同士のケンカが多くて、正直来るのが嫌になったことはあったけど、やめても路頭に迷うだけでしょ？「お金がもらえる」というのは働くひとつのモチベーションとして大事ね。

それと何をやるにしても、目標が見えているとやりやすいよね。病院にいた時は作業所が素晴らしいと思っていたけど、10年経つと作業所の限界が見えてくる。作業所から直接働きには行けないでしょう？働きにいくためにはなにがシステムをつくらなければいけない。そう思ってピアスを作ったの。そうしたら就職した後大変だとなって、フォローする場所が必要となってくる。それでオープナーを作って、さらに発達障害の人のためにコミュニケーションのプログラム(P.59～)も導入したの。

こんなふうの問題を解決するために色々なことをやるんだけど、最終目標が棕櫚亭の理念である「精神障害者の幸せ実現」からずれないようにしてやっていくと、ブレずに継続することができます。あとは、そうだな……エネルギーは個人的には枯渇するかもしれないけど、自分が枯渇したときに信頼できる次の人を育てておけば大丈夫よ。

Q.2 P.177-178には入院患者だった「Mさん」との出会いをきっかけに共同作業所の設立を思い立ったとあります。Mさんは天野さんにとってどんな人でしたか？

A.話も上手で穏やかな人なんだけど、退院するとすぐ再入院しちゃう。今だったら退院してデイケアに行ったりグループホームで友達と遊んだり、いろいろあるけど、その当時は何もなかった。あるとき病院の近くに作業所ができて「家も近いし、よさそうだからついてきてください」と、一緒に見に行くことになりました。

作業所ではみんな楽しそうに作業をしていて、Mさんは「通いたい、あそこなら大丈夫かもしれない」と言うのね。今まで仕事をしてきた方なので、作業所の作業でいいのかどうか？という思いはあったけど「まずは再発しないことが大事」というのを家族と確認して、作業所へ送り出しました。

当時は病院のことしか知らなかったから、元気になったMさんが作業所のことを説明してくれる姿を見て「こんなにも人は変わるのか」と感動しました。本にも書いたけれど、それ以来Mさんは入院していません。

Mさんに限らず、当事者に教わってきたという思いはあるけれど、もしMさんがいなかったら、病院のケースワーカーで終わっていたかもしれないと思うので、そういう意味で私にとっては特別な人ですね。

質問は創設者たる「4人の魔女」、「棕櫚亭」の名前の由来

Q.3 棕櫚亭を立ち上げたスタッフ4名を「4人の魔女」と形容していましたが、4人の思い出話など、一番印象に残っているエピソードがありましたら教えてください。

A.もともと地域で子育てをしている友達だったの。私の「作業所を作ろう」という一声にみんな「やろう」と言ってくれた。みんな外向きで派手な性格だったからケンカも多かったけど、フットワークがいいし、パパッと役割分担もできる。みんなの仕事力が高かったのは幸運だったかな。元々が友達だから、病院のような縦の関係じゃなく横の関係だったこともよかったですね。横並びの関係だからケンカも多いんだけど(笑)。

いろいろもめたりはしたけれど、みんな「病院ではなく地域で」という決意と、専業主婦じゃなかったたので「自分の力で生活していかなければいけない」という意志は一緒でした。だからこそうまくいったし、今ではそれぞれ独立して活躍しているわね。

Q.4 「4人の魔女」や、個人のエネルギーが枯渇しても助けてくれる誰かを見つけられた場所はどこですか？ どうやって見つけたのですか？

A.始める前からなんとなく、おたがい同じ「匂い」を感じとっていたのでしょうね。たくさん人がいるなかで「この人だ！」という人に出会うのはすごくたいへん。しゃべってみて「大丈夫だな」と思って、一緒に仕事をしようということになりました。そういう人を見つけるためには……自分のスタイルや自分らしさを大事にしていこうかもしれないな。

就労では気配を消すようなことをしないとイケないけれど、仲間を集めるためには逆に「匂い」を出さなきゃいけない。これがむずかしいところだよな。

Q.5 反対意見がありながらも「棕櫚亭(しゅろってい)」という名称に決まったのはなぜでしょうか。

A.作業所をやろうとしていた建物が棕櫚の木に囲まれた古い家だね。前の家主がいたときの状態から、ぜんぜん片づけられていなくて。そんな家が5年経ったままでぼつんとあるもんだから、近所の人困っていたの。棕櫚の木はすっかり根が大きくなっていて、これがなかなか抜けなくて！でも、この根の深さ、しぶとさは「地域に根を張る」にはいいんじゃないかってことで「棕櫚」、飲むのが好きな人たちがばかりだったからお店みたいに亭をつけて、それから読みやすく「っ」を入れて「棕櫚亭(しゅろってい)」になりました。

名前は一回つけると愛されていくの。はじめに否定されても、ゆっくり時間をかけてそれらしくなっていく気がするな。

ちなみに、ピアスは最初からコンセプトがありました。建物を建てることに地域の反対があって、既存の「精神障害」のイメージをくつがえす必要があったの。周りに配慮するのではなく「既成概念を破壊する」ための戦いね。建物も職員もきれいになってメンバーもきれいになって……という循環をねらっておしゃれな「ピアス」という名前にしました。



1993(平成5)年頃の棕櫚亭
建物の横に櫚の木が並んでいます。

そして、精神科病院の閉塞感へと広がっていきます……。

Q.6 第1節 精神病院放浪時代のP.156に「病院という完全なヒエラルキー社会」とあります。天野さんにとって良いヒエラルキー社会、悪いヒエラルキー社会はどういうものだと思いますか？

A良いヒエラルキーはあんまり体感したことがないですね、病院に5か所くらいいると医者を頂点として看護（看護の中にも細かいヒエラルキーがある）>ケースワーカー（一般的に、福祉事務所等で相談援助の仕事に就く職員のこと）という縦の関係を感じるよね。

なかでも最悪なのは、そのヒエラルキーの中に患者が入ってしまったとき。昔は体調のいい患者を看護の手伝いに行っていることがあったの。その、看護の手伝いをする人たちの下に一般の患者がいるわけだから、ヒエラルキーのいちばん下にいる患者が辛い目にあうということがよくありました。ここで、複雑な差別が起きてくるのが怖かったな。本にも書いたけれど、看護人が知的障害の人にホースで水をかけて笑っているなんていうこともあったし……(P.153)。**昔は今と違って患者の人権意識は皆無でした。**

Q.7 精神科病院は「プライバシーの問題があるため、取材を受けない」というところもあると聞きます。病院の透明化とプライバシーは難しい関係ですが、天野さんはどうお考えですか？

A精神病院は経営者の質が問われます。歴史的に患者を入れることで儲かるという構造があり、その名残があるの。海外は公立病院が多いから法改正で大きく動くけど、日本は8割くらいが民間病院で、儲け主義でやってきてしまったところがある。そういうところは情報をオープンにするのをためらう。一方で「変えていこう」という意識でオープンしてきた病院もある。それでもまだ、オープンなところは少ないかな。

たしかに、医療が必要な場面はあります。でも悪い病院に行くと、人権意識のない扱いを受ければ悪化してしまうという現状もある。どうしても「無理しないでね」と言ってしまうけれど、本来は**「かんばって見て、どうしてもなら休んでもいい」というふうになるのが理想的**ね。プライバシーの問題と言うよりは病院の経営の姿勢が変わらないといけないかなと思います。

Q.8 最後に……この本を読んでもらいたい方は誰でしょうか。

Aまずは自分の子供たち。今までたくさん迷惑をかけてきたので……仕事をやりすぎると子育てが不十分になっちゃうのかもね。本ができていちばん最初に送りました。

次に病院の若い職員たち。精神保健の歴史を知ってほしい。**次世代のひとびとに読んで、つなげていってもらいたい。**

そして当事者の人たちには、**自分の力を信じてほしい。**そういう意味ではみんな読んでほしいな。



けっこう読み込んでくれたのだなあと感じました。主治医やケースワーカーに今日の話を伝えてもらえたらうれしいわね。**みんな、特性や自分らしさがあるから、自分を受け入れながらも「匂い」を出していけば必ず出会いはあります。**

就職活動のときは世の中から要求された姿にあわせていくことはあるけれど、**本来の自分のありかたを捨てる必要はない**わ。ときどきこういう場所で共有できるといいね。

インタビューを終えて……

精神病院について、クリーンな環境づくりをどうすればいいのか質問させていただきました。地域に向けて発信できる病院が増えてほしいなと感じました。

(K.T)

ピアス開所の原動力が、誰もが持つ「生きる為」だったことに、とても親しみを感じました。

(H.M)

現在のピアスにいたるまでの歴史が分かって興味深かったです。天野さんの人柄がインタビューを通じて伝わってきて感銘を受けました。

(S.M)

インタビュー前はとても緊張しましたが、お話をしてみるととてもパワフルで強い信念をもたれている方だと思いました。棕櫚亭創設の経緯や直接お話ししないと聞けないことなど、ためになるお話を沢山お聞きすることができ貴重な経験ができました。

(Y.A)

とても明るくお答えいただき、緊張感ある場が楽しい雰囲気になりました。初めて進行を務めました。スムーズに終わることができたのも天野さんのおかげです。Mさんとの出会いや「4人の魔女」がお互いの匂いを感じ取り、ケンカしながらではありましたが「作業所を建てたい」という決意のもと多くの苦勞を乗り越え、今日のピアスが出来あがったことに感激しました。

貴重な時間を過ごし、勉強になりました。本当にありがとうございました。

(Y.K)

天野さん、お忙しい中ありがとうございました！

『精神障害のある人の就労定着支援～当事者の希望から生まれた技法～』は
全国書店にて好評発売中です！

特設サイトで通販も受け付けています。アクセスは右のQRコードから！



出版記念パーティーのお知らせ

今回特集している通り、1年以上かけて準備してきた棕櫚亭3冊目になる本がついに出版されました！

『僕のことを話そうか（作業所物語）』、『ピアス物語』に続く、20年培った棕櫚亭の就労支援のノウハウを現場の職員が書いています。そしてこの就労支援が生まれるまでの長い歴史が、前理事長天野聖子さんの病院ケースワーカー時代に遡って紐解かれています。

パーティーでは、天野さんの記念講演に加えて、飲み物やお菓子をつまみながら出版を祝いたと思います。

●日付 7/13(土) 13:00～15:00

●場所 ピアス2F

●参加費 300円

ピアスOBの方は7/8をめどに、参加連絡をピアス(042-571-6055)までお願いいたします。

たくさんのご参加をお待ちしています！

ピアス 高橋しのぶ

【編集】 国立市富士見台1-17-4

社会福祉法人 多摩棕櫚亭協会 就労移行支援事業所ピアス内
はれのちくもり編集委員会 Tel 042-575-5911

【発行】 特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
〒157-0072 世田谷区祖師谷3-1-17-102

Tel 03-6277-9611

【定価】 100円